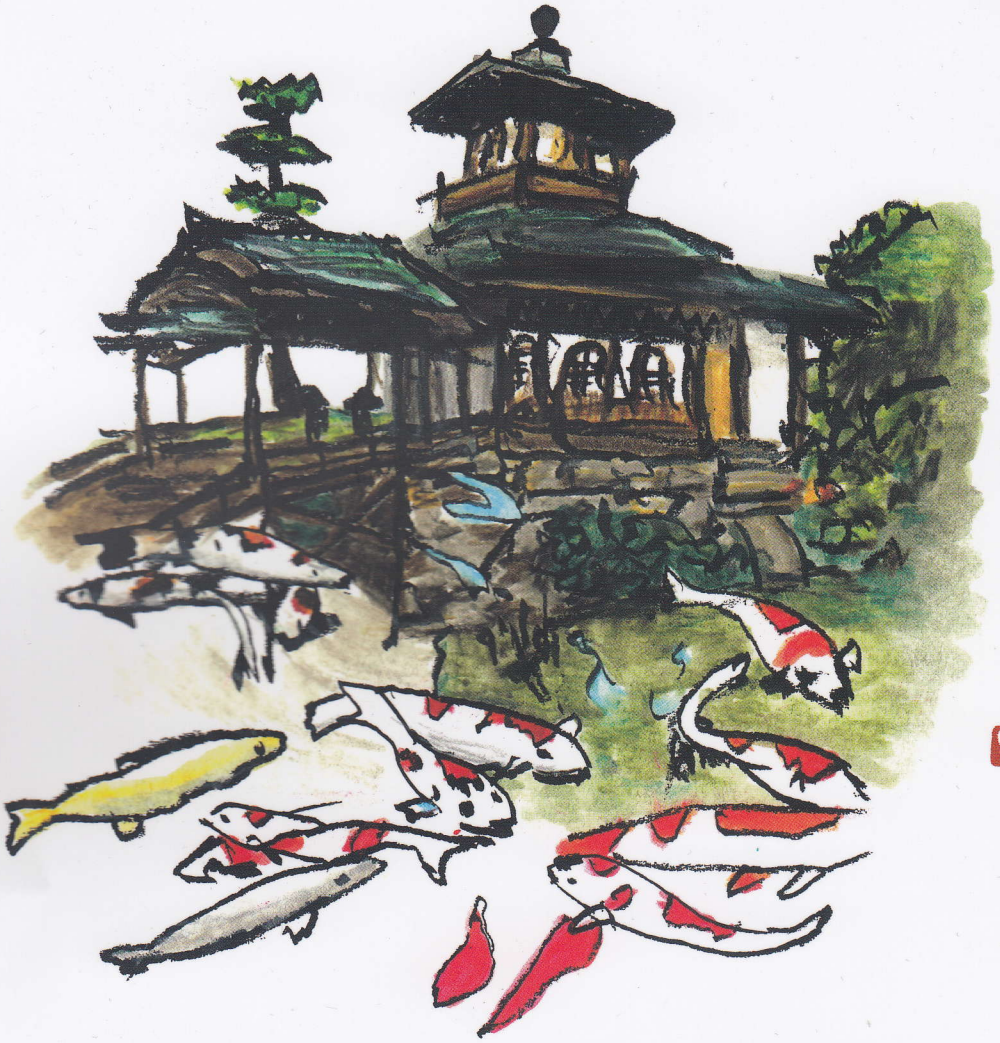
つながり



巻頭対談

観光立国への期待と課題

理化学研究所理事長
（第25代京都大学総長）
松本 紘

×

㈱ホテルニューグランド社長
濱田賢治

vol. 16
秋号 2015年10月発行

衣

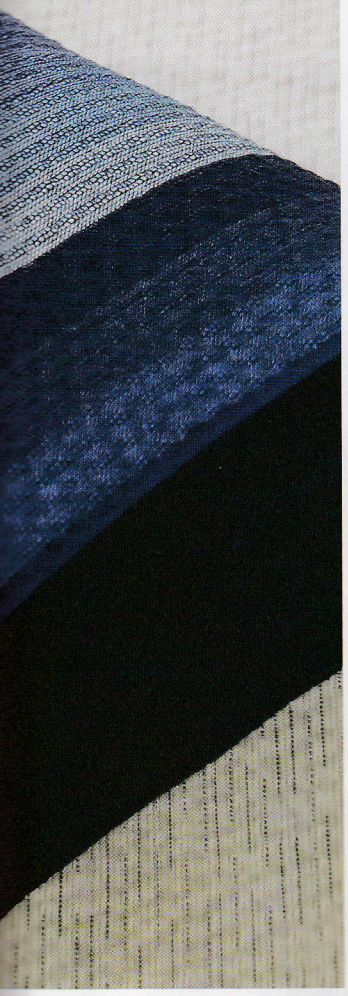
i

藍染めと織りしぼが清涼感を醸し出す阿波しじら織

【徳島】

阿波藍の染めと織りしぼづくりの技が融合し、夏衣の生地として人気を博してきた阿波しじら織。清涼感と肌触りが夏に〝涼〟をもたらす。

文―足利崇志　撮影―木村圭司



夏祭りを演出する夏衣として定着

えらいやっちゃ、えらいやっちゃ、ヨイヨイヨイヨイ。踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らな損々――の軽快な〝よしこの〟のリズムに乗って、連と呼ばれる踊り手の集団が真夏の夜に阿波の国「徳島」の街

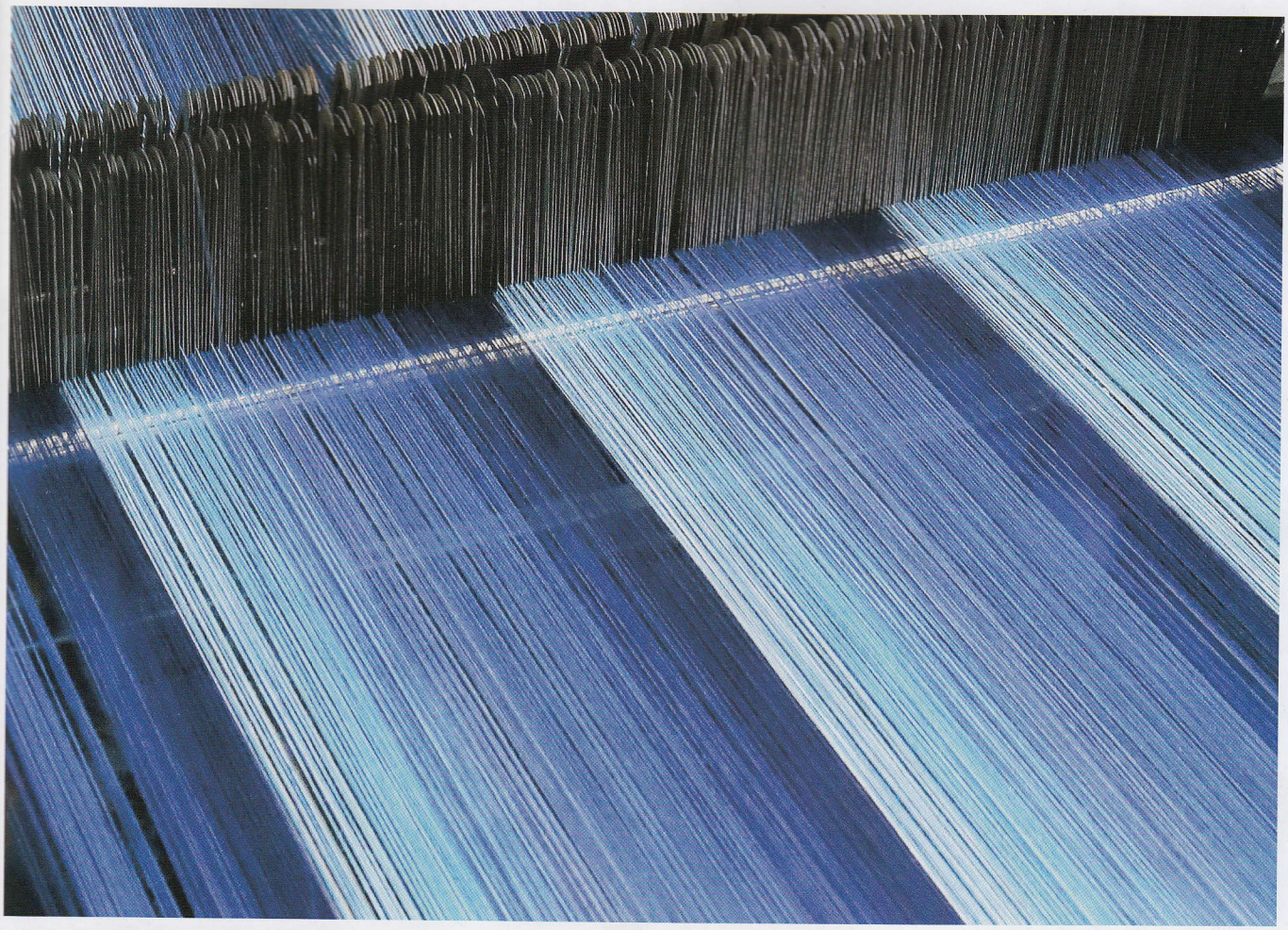
「しぼ」と呼ばれる表面の凹凸と藍染め藍色が、さらりとした肌触りと涼しさを感じさせる。

開府より400年余り続く四国・徳島の夏の風物詩である。

夏と言えば、徳島には蒸し暑い夏を涼しく過ごす夏衣に適した着物生地を織り上げる阿波しじら織がある。徳島の伝統織物である阿波しじら織は、独特の織り方でできる「しぼ」と呼ばれる波状の凹凸が特徴の綿織物だが、徳島県産の阿波藍で染めた糸で織り上げる藍色の色彩と相俟って、暑い夏に〝涼〟をもたらす清涼感と肌触りが魅力だ。

「阿波縮」とも呼ばれるしじら織を創案したのは、明治維新当時、阿波安宅村（現在の徳島市安宅町）で機織をしていた海部花という織女だった。江戸時代末期の慶応元年（1865年）の夏の暑い日のことだった。花が内職で織り上げ、戸外に干してあった縞（織り生地）が夕立ちのにわか雨でずぶ濡れになったが、雨がやんだ後の強い日差しにさらされて乾いた布は、表面がところどころ縮んで凹凸ができていた。その部分は花が糸の本数を間違えて織った箇所だったが、これをヒントに彼女は糸の本数を増やし、熱湯に浸すなどの工夫を重ねて、「しぼ」のある縮み縞をつくりあげた。

この新しい生地に目をつけた木綿商の安部重兵衛は1869年に「阿



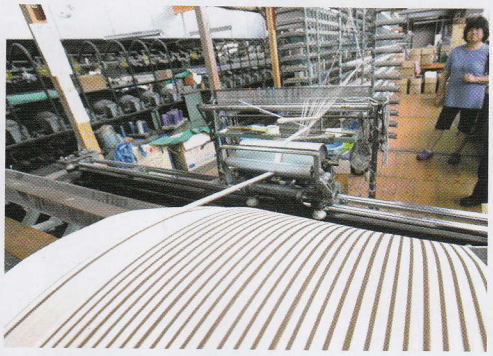
▲自動織機によるしじら織の製織。

波しじら」と名付け、販売したところ、これが飛ぶように売れた。1887年頃には年間生産高が百五十万反となり、徳島県内に200軒を超えるしじら織の機屋と5000人の従業員を抱える織物産地を形成するに至った。

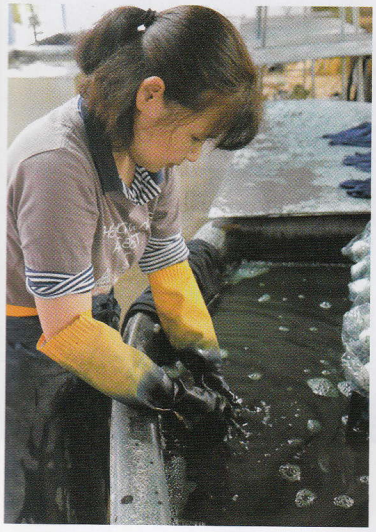
織の技がつくり出す「しぼ」

普通の縮や縮緬の「しぼ」（皺）は、緯糸に強い撚りをかけて織ったり、織った後に湯もみして撚りを戻して「しぼ」をつくる。だが、しじら織は平織と引揃という2種類の織り方を交互に組み合わせることで、糸の張力差によって「しぼ」をつくる。平織の経糸は6本、引揃の経糸は3本を2条にまとめて緯糸を通して織り上げる。これにより、しっかりした「しぼ」ができ、肌触りがよく、夏でも着やすい着尺地に仕上がる。

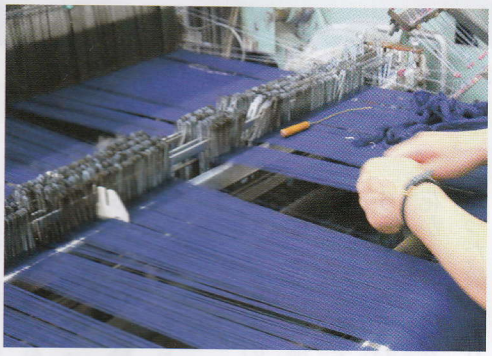
徳島市国府町で阿波しじら織を製造、販売している長尾織布合名会社は、明治30年創業の老舗織元で、染めから織り、仕上げまで全工程を一貫作業で手掛けている。そこで、吉野川支流の鮎喰川の河畔にある同社を訪れ、阿波しじら織ができるまでの製造工程を見聞した。



▲織物の緯糸を整える整経作業。



▲葉藍からつくる「すくも」を使った天然の染料による藍染め作業。



▶前工程で織った緯糸に新しい緯糸をつなぐ「つなぎ工程」。

同社の長尾伊太郎代表によれば、阿波しじら織は紡績から供給された原糸を筒状のものに巻き取る「総上げ」をし、綿糸の不純物を除去する「精練」と呼ばれる煮沸の後で糸を藍の溶液に浸けて「藍染め」をする。藍染めは総糸を1㎞くらいの竹の棒にぶら下げ、藍甕の液に浸して糸を繰りながら藍液が糸に浸透し、むらなく染める。この染色工程は近年、化学染料で染めることが多くなったものの、徳島で栽培された葉藍からつくる「すくも」を使った天然の阿波藍染め染料で染めたしじら織は「阿波正藍しじら織」と称され、昭和53年に国の伝統的工芸品の指定を受けている。

染色した糸は水洗いし、天日干しをして乾燥後、製織を容易にするため、糊付けする。その後で経糸は整経、緯糸は緯巻と呼ばれる準備工程を経て、製織に入る。

整経は経糸の本数、幅、長さ、色糸の配列などを整え、整経機に巻き取る作業。経糸の張力差で「しぼ」を出す阿波しじら織の重要な工程である。緯巻は緯糸を管巻機で木管に巻き、織機に供給する作業である。

こうした準備工程を経て製織に入るが、平織部と引揃部の組み合わせ組織が「しぼ」となるため、平織部は経糸6本を各々1本通しとし、引揃部は経糸6本を3本ずつ2条に引き揃えて製織する。

日本のものづくりの一翼を担い続ける

長尾織布では現在、着尺地を織る小幅織機が80台、レピア式の自動織機が10台、洋装品などを織る広幅対応の力織機が8台ほど稼働し、しじら織の生地を製織している。

「和装から洋装へ、小幅から広幅へと需要が推移する中で、当社は市場のニーズに応えるための製造体制、デザイン、商品企画に取り組んでいる。当社のしじら織は藍だけでなく、108色の糸を使い、200を超える色柄の生地を制作、提供している」と語る長尾伊太郎氏。その視線は政府が進めるクールジャパン政策を踏まえて、新しい商品開発と販路開拓を見据えている。

「当社の製品は、浴衣などの着物はもちろん、最近はネクタイ、シャツ、和装小物、寝装・寝具、インテリア製品など、しじら織と藍染め関連のさまざまな商品を企画開発し、製造販売している。今後も徳島の地域資源である阿波しじら織や阿波藍染めの製品開発を通して、メイド・イン・ジャパンの日本のものづくりに貢献していきたい。また、クールジャパンの一翼を担って海外需要の開拓にも取り組んでいきたい」と、長尾氏の夢は広がる。

◀「しじら織と藍染めで徳島発のクールジャパンを推進している」と語る長尾伊太郎長尾織布合名会社代表。

◀伝統工芸品の阿波正藍しじら織。

▼夏衣に適したしじら織の着物。